

風につたへい

「その風を得て、心より心に伝ふる花なれば、風姿花伝と名づく」(世阿弥)。
——水のような清らかな心で、道風に想いを馳せ、そして新風を試みながら。
新鋭作家が日々の中で“気づき”を綴る、連載エッセイ。



サイバー都市に浮かぶ映像
うつし、うつされるもの

文/木下真理子

いたのは、モックルームの世界。まるで量子物理学の素粒子の動きを想像させる、線と点の動き。

以前から書をモーションで表現したいと思っていた私はこの作りに巡り合った。ゴッフルを外し立ち上がると、そこに制作者の山本さんがいた。山本さんは、SONY MUSICのC&Jや日本科学未来館の常設展示映像なども手掛けられている。先のVRのオリジナルウィジョは、今年、文化庁メディア芸術祭アート部門・審査委員会推薦作品に選出された。その作品が未来館で特別上映されると聞き、今度はそこに伺った。会場の「ドームシアターガイオ」は、東京湾の臨海区域にそびえる全体が傾斜型のビルの中腹に、ドームの半分を突き出し、外から見ると宙に浮いているかのような建物だ。その内部は国内で初めて全天周・超高精細3D映像システムが導入され、空や宇宙を仰ぐような姿勢で椅子に腰かけるという造り。いわゆる全身で映像を受け止めることが出来る。

プログラムが始まり、深い闇の中に私は引きずり込まれた。得体の知れない光が静かに生じ、時に荒々しく、時空を割いて現れる。何処かへ消えてゆく。それは有無の機微、生命の業を目的としているようにあり、また自分が脳神経に迷い込んでしまったかのような体験でもあった。

それから山本さんとは何度かお会いして、映像制作の実際について聞いたり、私からはKENPOKU ART 2016に出品した書による「イナスタレーション」(四三号で紹介)について話をすると、共同で作品を制作しようということになった。この試みは、山本さんが引き寄せた先鋭的な音楽家のコリィ・フラーさんも参加している。コリィさんの音楽は、あえて例えるならアムンビエントに近いのはいないかと思うが、坂本龍一さんのコラレーション作品も知られている。打ち合わせで、三人の中には「サイクル」というキーワードが内在している気がした。サイクルとは生成と消滅は、繰り返すという一感覚で、流れゆく河に似ても、所々で渦だったり、また雨が降ると水面に波紋が浮かぶ、そんなところをサイクルを感じる。

このコラレーションは、まず私が「方丈記」の一篇を揮毫し、その書をKENPOKU ART 2016と同様の概念と手法によって、書を正方向のピースに分解した。それを山本さんがプログラム(シフト)の方程式で何かを代入して、得られた予期せぬ偶発的なパターンを取り入れることによって映像化。山本さんいわく「文字と色と周期を、波の

1. ライトアップされた夜の都庁 2. 新宿クリエイターズ・ファースターの一角で新宿ユニカビジョンに映し出された「Fragments」。木下真理子の書作品「方丈記」が断片化され、音とともに流れ落ちる 3. 新宿の賑わいと変化する 4. 歌舞伎町には多国籍の人がひしめき、人の活動や欲望が飽和する雑居 5. 行き交う人流に無常観を抱く木下、エクスビジョン「ハイム・モエス」前にて 写真/金武武撮影 新宿クリエイターズ・ファースター 2019 出品作品の上映風景はか



一九八二年に公開されたリドリースコット監督の「フレッドランナー」は、圧倒的な映像美、ヴァン・クリスの歌美な音楽、人間の存在価値を問いかけてくるテーマなどにより、SF映画の金字塔とされている。舞台は、二〇一九年十一月のロサンゼルス。高度な知能と強靱な肉体を持った人間に見紛うアンドロイド「フリカント」を、警察の特捜班「フレッドランナー」が追撃してゆく。

有難な酸性雨が降り注ぎ、超高ビルが建ち並ぶ中、大きな壁面ビジョンには至る所のアップによる「強力わかもと」のCMが映し出され、強烈な印象を残す。公開当時それは、街頭ビジョンの草分けとして既にあった新宿のルックビジョンとオーバードラップして捉えられた。またハリソン・フォード演じるリック・デッカーがレプリカシティと戦う街角もゴイルデン街彷彿させ、歌舞伎町のようにデジタルサイネージで彩られていて、中国語や日本語が混濁し、文字や言語の正しい、正しくないも超絶して、アジア以外にラビックな要素もミックスされているなど、異文化の集積と共有する曖昧さは、親しと深さを感じさせる。

また、近未来のSF映画と絡打たれていたために、当時からこのカンニング的な雲間気を漂わせているが、それも意図されたところだろう。公開当時から見れば、今まさに、私たちはその未来に立っている。ただ、実際の二〇一九年には何が有って、何が無いのか、それを明らかにすることに意味がないことも、この映画は伝えている。

時を遡ること、約八〇年前。大火、辻風、飢饉、地震に加えて連都まで散行された京都。賀茂御祖神社(鴨神社)の神職を受け継ぐ出自でありながら、鴨長明は出家し、遁世した。そして世の中に常なるものなどない、無常観を抱きながら、流れゆくまに「方丈記」を綴った。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかもと水にあらず。よみて浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとままりたるためしなし」。

この感覚を共有したと思った私は、「方丈記」を揮毫した。

映像作家の山本信一さんと出合ったのはその頃。今年の二月だった。知人と訪れたアイギヤラリーに、電子音楽とデジタルアートの祭典として世界的に知られるMUTEKのブースがあった。ゴッフルヘッドファンを装着して椅子に座り、VRウィッチャーリアリートの映像を鑑賞、各国から集められた幾つもの作品を観てゆく中で、釘付けになった作品があった。最新技術を使った作品にも拘らず、そこに展開されてきた作品が、約八〇年前に上映された。新宿区が主催する「新宿クリエイターズ・ファースター」の一環だった。

今回、作品制作の過程で、私はテクノロジーの進化に触れながら、むしろ人間性とは何かというのを、常に自分に問いかけていた。それは一昨年、フレッドランナー2014.9が三十五年経ったの続編として公開されたこともあるのかもしれない。その続編は、私たちに課せられていることが予見されていた。世界は西海岸岸の原因不明の大停電により、デジタルデータは全リセットされ、残った記録媒体は紙にのみだけ、レプリカントが双輪活動や探検に従事する。反乱を企てるとまたフレッドランナーが撃退してゆくという展開。悲劇は繰り返されていた。結局、フクシヨンのフレッドランナーのデカードにしても、リアルな世界で「方丈記」を書いた展開にしても、どんなに完全無欠、完璧なものを目の当たりにしても、そこにはなにかや「虚無感」を感じてしまふ、そんな心の振る舞いこそ、人間らしきものなのかもしれない。

完成した作品を現実の新宿で観ることになった。張り巡らされたAIは既に行動している……。大量の情報と人が交差し、欲望、失望、絶望、希望が散乱する中、観覧の視点、メタ視点として観る。形あるものは空から生まれ、空の中に回帰し、「私」という自己も明滅する街の断片に過ぎない、と人間らしく、そう感じた。

傍で山本さんが呟いた、「自分がいるところ、思っているところ、それってどの自分のなかか。自分がどう思っていることが本当に自分のなかか。」

木下真理子(きのした まりこ) 1971年、大阪府大阪市生まれ。高本聖樹(たかもと けい) 映画監督、脚本家、演出家。NHK「はろーど」の制作を手掛け、目撃者「連続殺人」伝説文化としての芸術能力を現代文化「プロパ」により伝えている。美しい文字デザインと国内外で展覧中。